

共感的な問いを育む社会科学習の支援

—第6学年単元『15年にわたる戦争』の実践をもとにして—

富村 誠

1 研究課題

近現代の歴史を扱う社会科学習に対して、藤岡信勝氏は、次のように分析し提言を加えている¹⁾。

従来の日本の平和教育は「原爆」をどう考えてきたか。原爆の悲惨さを、絵や写真や物語や詩で印象づけ、それがいかに悲惨なものであったかということを見せて、二度と再びこういう悲惨な戦争はしまいということ、子供が胸が痛くなるほど心に誓う、そういう平和教育が主流だったのではないかと思います。
《歴史学習の現状分析》²⁾

その路線にそって日本人はもっぱら、原爆の被害の悲惨さということだけを教え込まれてきた。しかし現在、日本人は年間一千二百万人以上の人々が海外に出かけているわけです。そのなかでは当然、イギリス人、アメリカ人を含めて、さまざまな外国の人たちと付き合う機会があるわけです。ところで、アメリカ人の圧倒的多数の人たちは、「原爆投下は正しいデシジョン（決定）だったんだ」というふうに思っています。世論調査をしても、そういうことははっきり出ます。そういうアメリカ人に向かって、日本人はその考えの当否を論じる言葉を持たないんですね。要するに“原爆は悲惨だ、ひどいものだ”としか考えたことがない。《中略》要するに、議論ができないわけです。今までの日本の平和教育、歴史教育はそういう、議論ができない状態に国民を放置してきたのです。
《歴史学習の問題点》³⁾

原爆投下という決定はどういう意味を持ったのかということ、一度自分たちの感情を殺して——といったら変ですけど——もう五十年経ったんですから、それを対象化して議論してみるということは、ほかならぬ日本人にとってこそ一番必要なことではないか、と思うわけです。ですから、今までのような、原爆の悲惨さを教え平和の願いを心に刻み込む、そういう社会科と、チャーチル発言《原爆投下は正しい決定だった》の当否を議論するような社会科と、明瞭な二つの路線があるように思うんです。私は前者がまったく要らなくなるということはありませんが、後者の側面をより取り込んだ平和教育・歴史教育が必要だと思うわけです。
《問題点を改善する歴史学習への提言》⁴⁾

国際平和文化都市・ヒロシマに住む子どもたちにとって、「原爆投下」という歴史的事象のもつ意味は大きく重い。アジア大会に参加した外国人選手を対象にした共同通信のアンケートが伝えるように、「原爆投下が終戦を早めた」という見方について半数が肯定し、日本の戦争への加害面を指摘する厳しい意見が寄せられる今日の状況である。原爆投下に至る歴史的事象を扱う歴史学習をどのように構成していくかということは、重要な実践上の研究課題だと考えることができる。

本稿では、太平洋戦争開戦と原子爆弾投下とにかかわる日常素材（①クリントン大統領が12月8日を「真珠湾追憶の日」に制定したこと、②アメリカ郵便公社が「原爆記念切手」を来春に発行する予定であること）を窓口に取り上げた第6学年単元『15年にわたる戦争』をもとに、共感的に問いかけ社会へ働きかける豊かな感性をもった子どもを育む社会科学習の導入部における教師の支援活動のあり方について、考察を加えていきたい⁶⁾。

2 研究仮説（授業仮説）と分析の視点・方法

(1) 研究仮説（授業仮説）

①②原爆記念切手の発行について、③その是非を考え合う活動（討論）の場を設定すれば、児童は、原爆投下に至るまでの戦争について調べるめあてをもつことができるであろう。

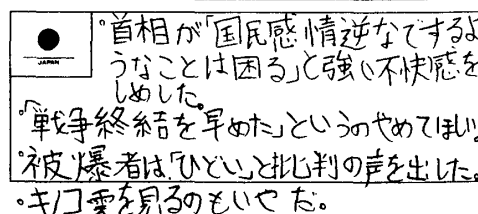
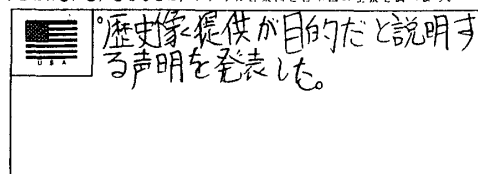
(2) 分析の視点・方法

- ① 「真珠湾追憶の日」と「原爆記念切手の発行」の事象は、原爆投下に至るまでの戦争について調べていこうというめあてをもたせるために有効であったか。
- ② 原爆記念切手などの情報資料（真珠湾の写真・原爆投下の写真・原爆記念切手の写真・報道番組VTR・新聞報道記事）は、主体的に自分なりの考えをもたせるための教師の支援として適切であったか。
- ③ 討論の場の設定は、主体的に自分なりの考えをもたせるうえで有効であったか。

なお、分析にあたっては、VTRによる授業記録や学習過程に即して作成した学習プリントをもとに、児童の発言、記述内容、教師の支援活動を抽出する方法に依った。本実践事例で用いた学習プリントと記述内容例の実際を示すと、次の通りである。



学習資料①、②、③をもとに、アメリカ合衆国と日本国の主張を調べよう。

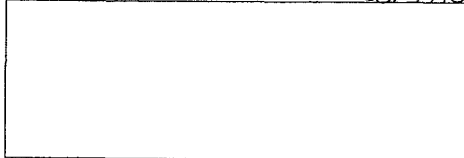


あなたは、どちらの主張に賛成ですか？ そう思うわけも、書きましょう。

わたしは、 の主張に賛成です。

「また、今でも被爆して苦しんでいる人がいたり原爆によって家族を亡くした人もいたりするのだから、その人たちにとっては、どちらの主張でもない考えの人は、次に書きましょう。」

どちらの主張でもない考えの人は、次に書きましょう。



今日の学習をふりかえり これから調べてみたいこと 気づいたことや感じたことなどを書こう。

これから調べてみたいこと
「日本は原爆が投下されるくらいのようなことをしてきたのか。」

気づいたことや感じたこと
「日本が悪いのは悪いが、被爆者の気持ちを考えると、切手は作らないがよいと思いました。」

方 5年 1組 名前

3 実践事例 第6学年単元『15年にわたる戦争』（第一次 第1時「今 アメリカで」）

(1) 単元について

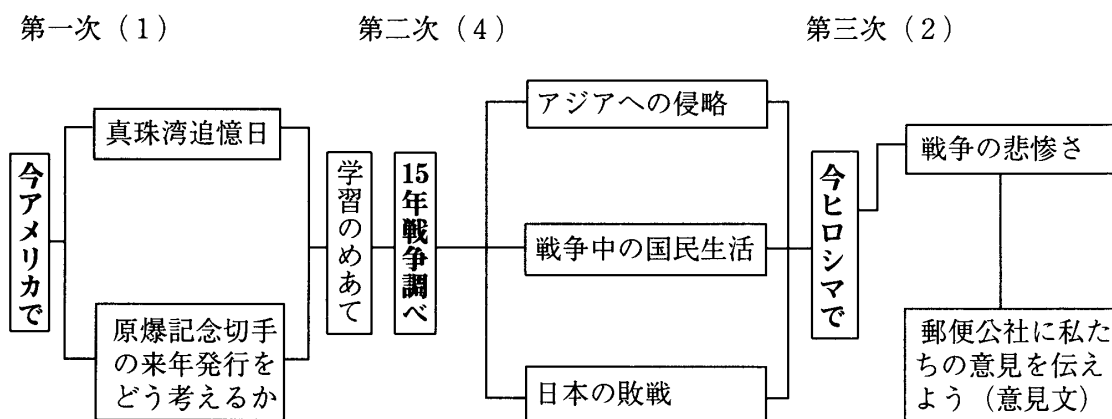
国際社会に生きる日本人としての資質の基礎を養ううえで、日華事変、我が国にかかわる第二次世界大戦（太平洋戦争）という歴史的事象を学習する意義は極めて大きい。中国残留日本人孤児肉親捜しの継続、被爆者援護法案の審議、国際連合規約にある「敵国条項」の検討など、アジアへの侵略に始まった15年戦争の教訓を生かすべき今日的課題も多い。

児童たちは9月3日に平和記念資料館を見学し、原子爆弾が落とされた後の広島の様状に触れた。見学後の感想には、初めて当館を訪れた児童（38名中21名）を中心に「このような恐ろしい戦争がどうして起きたのか」という素朴な疑問が多く記されていた。そこで、本単元では、太平洋戦争開戦と原子爆弾投下とに関わる日常素材（クリントン大統領12月8日を「真珠湾追憶の日」に制定、アメリカ郵便公社「原爆記念切手」来年発行）を窓口に、原爆投下に至った15年戦争を主体的にとらえていけるよう、学習の場づくりをしていきたい。

(2) 指導目標

- ① 日中戦争，太平洋戦争と続いた15年戦争の様子を調べ，日本が引き起こした侵略戦争の実態を理解することができるようにする。
- ② 新聞時事資料，年表，地図や写真などを手がかりに，15年戦争の特色をとらえ，戦争の悲惨さに気づき平和を大切にする実践力を育むことができるようにする。

(3) 指導内容と計画……………7時間（本時 第一次 第1時）



(4) 授業設計の焦点

歴史は、現在と過去との対話であり、過去の歴史的な事象は、過去のゆえに問題となるのではなく、我々が生きる現在にとっての意味ゆえに問題となると指摘されている（E・H・カー）。本時は、「アジアへの侵略に始まった15年戦争」という歴史的な事象を扱う小単元の導入の時間である。そして、本8日を「真珠湾追憶の日」に制定したアメリカ合衆国では、来年に向けて原爆記念切手の発行が検討されている。児童たちに「発行をどう考えるか」と問うことによって、単元を通してめあてを一人ひとりにもたせていきたいと考えた。

(5) 本時の目標

原爆記念切手の発行についてその是非を考え合う活動を通して、原爆投下に至るまでの戦争について調べるめあてをもつことができる。


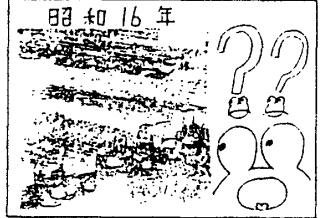


(6) 準備

新聞報道記事 報道番組VTR 学習プリント 国旗カード 国旗シール

(7) 評価の観点

意欲・態度	発行に関する日米両国の主張の特色を見い出すことに意欲をもつ。
思考・判断	両国の主張をもとに原爆切手発行に対して自分なりの考えをもつことができる。
技能・表現	自分なりの考えを、記述や事実など根拠をもとに、伝えることができる。
知識・理解	発行の是非を決めるため投下に至る戦争調べの必要性に気付くことができる。

(8) 学習の展開

学習活動	指導・支援活動の実際
<p>1 「今日はどんな日クイズ」をする。</p> <p>2 広島・長崎に投下された原子爆弾のキノコ雲をデザインした「原爆記念切手」が来年アメリカ合衆国で発行されようとしていることを知る。</p>	<p>1 本時の学習では、12月8日に端を発した太平洋戦争、その最終期の原子爆弾投下に関わる内容を扱う。その伏線、および学習態勢づくり（集中する・楽しさを味わう）の一環としてクイズを行った。</p> <p>2 原爆記念切手の発行予定という事実を目を向けさせるため、報道番組（ブロードキャスター、サンデーモーニング）のVTRを視聴する場を設け、切手の静止画像を提示した。</p> <p>▼今日生まれた人は？▼</p>  <p>▼1941年は？（紙芝居）▼</p>  <p>◎当番組や新聞報道などで既に知っている児童が多く、その鋭く感じ取るよさを認める言葉かけを行った。</p> <p>・切手発行の概要は、簡潔に補説した。</p>
<p>3 原爆記念切手発行についてのアメリカ合衆国と日本国の主張を新聞記事で調べ、自分はどうちらに賛成するかを考える。</p>	<p>3 活動2で事実を提示した際、意思判断の明確な発言がなかったため、国によって賛否が分かれていることを告げ、読み取り考える場を設けることとした。</p> <p>◎思考活動は、新聞報道記事を構成した学習プリントによってすすめた。その際、個別の机間指導、自分の考えを明確に示すための国旗シールの活用を図り、確かな活動となるよう留意した。</p> 
<p>4 自分なりの考えを出し合い、発行の是非を決めるためには原爆投下に至るまでの戦争について調べていくことが大切であることに気付く。</p>	<p>4 活動3での考えの出し合いから学習に入った。投下に至るまでの戦争を調べる必要に目を向けるため、次の支援を行った。</p> <p>・考え方が均衡した（日本24名、アメリカ13名、中立1名）ため、両国の主張を出し合う場を設けた。</p> <p>◎気付きを促すため、国別の主張や考えを構造的な板書で位置づけた。</p> 
<p>5 学習を振り返り、今後の学習について見通しをもつ。</p>	<p>5 本時を振り返り、気付いたことや感じたこと、これから調べたいことをプリントにまとめる時間を確保した。</p> <p>▼構造的な板書の工夫（終了時）▼</p> 

4 考 察

(1) 「真珠湾追憶の日」と「原爆記念切手の発行」の事象は、原爆投下に至るまでの戦争について調べていこうというめあてをもたせるために有効であったか。

学習プリントの「今日の学習をふりかえり」の「これから調べてみたいこと」の内容をもとに考察を加えたい。学級児童38名の内容（複数回答：46名分）は、表-1の通りである。

① 「真珠湾追憶の日」と「原爆記念切手の発行」の事象は、学習6日前の12月2日の朝刊に報道されるというタイムリーな事柄であり、社会論争問題としてクローズアップされていたために、多数の子どもたちがその情報に興味を示した。「これから調べてみたいこと」を記した46名中19名（41%）、めあて23項目中8項目（35%）といった、第二次世界大戦記念切手に関する内容への集中度は、事象のもつ誘意性の表れだと言えよう。

② 第2の集中度を示したのが、戦争に関する内容（人数で37%、項目数で30%）であった。本単元の学習を貫くめあて意識として妥当なものだと考えることができる。他方、学習中の発言として日中戦争に関わる「南京事件」を挙げるものがあつたものの、子どもたちのめあての多くは、太平洋戦争に向けられていった。本時の扱いでは、15年戦争全般を見通しためあては弱かつたものと思われる。発言や記述を歴史年表に位置づけたり、太平洋戦争がどうして起こつたのかを問題史的に遡って問いかけたりといった支援の手だてが必要だつたと考えられる。

③ タイムリーな日常素材を学習化することによって、現在（C）・過去（A, B）・未来（D：今後の日米関係）へと展開する多様なめあてが生み出されていった。歴史的事象を現在と切り離して単なる過去のこととして調べさせるのではなく、現在の問題解決のための手段として調べる必要性に目を向けさせていこうとした単元構成のよさのひとつの表れであると考えることができる。

(2) 原爆記念切手などの情報資料（真珠湾の写真・原爆投下の写真・原爆記念切手の写真・報道番組VTR・新聞報道記事）は、主体的に自分なりの考えをもたせるための教師の支援として適切であつたか。

① 原爆記念切手に書き添えられている「原爆が戦争終結を早める、1945年8月」という記述に興味をもたせ、吟味を加えさせていくうえで、情報資料は、かなり有効であつたと思われる。

【表-1】 「これから調べてみたいこと」	
A 戦争に関する内容	17名
・戦争について詳しく調べたい。	9
・日本に原爆が投下されたわけ。	3
・日本の人は真珠湾攻撃を予め知っていたか。	
・日本が他国に与えた事件や戦争について。	
・どのくらいのアメリカ兵が攻めてきたのか。	
・なぜ平和に生きていこうとしなかつたのか。	
・世界の国々も日本もなぜ自分が強いことを主張しなければならぬのか。	
B 原爆そのものに関する内容	6名
・東京大空襲と原爆とはどう違うのだろうか。	
・アメリカが作った原爆の量を調べたい。	
・被害を受けた人はどう思っているのだろうか。	
・なぜ原爆投下で実験をしたのか。	
・原爆投下したアメリカの気持ちを調べたい。	
・なぜ原爆は広島と長崎に投下されたのか。	
C 第二次世界大戦記念切手に関する内容	19名
・残りの9枚はどんな内容なのか。	4
・本当に切手は発行されるのか。	3
・日米の主張の違いについて調べたい。	3
・被爆者は切手をどう思っているのか。	3
・「ひどい」と言われたアメリカ人の気持ち。	2
・なぜ、きのこ雲の切手にするのか。	2
・日本とアメリカ以外の人はどう思うのか。	
・誰がこの切手を発行しようとしたのか。	
D その他の内容	4名
・今後、日本とアメリカとの関係はどのようになっていくのか。	3
・歴史に関係のある切手を調べてみたい。	

原爆のキノコ雲を図柄とした米国の記念切手の原案（AP社共同）



Atomic bombs hasten war's end August 1945

席の子どもと同一であったり、日米の主張を間違えて記したりといった状況が見受けられた。その点で、新聞報道記事を全ての子どもたちが理解し日米両国の主張を正しく見つけ出すことには無理があったように思われる。

③ 新聞資料のよさを生かすためには、自分なりに赤線・青線を引いて読みとる活動の後、全体で新聞をもとにしながらか国の主張を確認していく場を設ける必要があったものと考えられる。

(3) 討論の場の設定は、主体的に自分なりの考えをもたせるうえで有効であったか。

日本の立場（24名）、アメリカの立場（13名）、中立の立場（1名）に分かれての討論となった。討論の後に立場をかえた子どもは2名（中立からアメリカへ：1名、アメリカから中立へ：1名）であり、結果として、討論による主張の変容は見られなかった。学習プリントから、主張に賛成するわけ（根拠）の内容を示すと、表-2の通りである。

① 日本の主張に賛成する根拠としては原爆被害の悲惨さに目を向けたものが多く、アメリカの主張に賛成する根拠としては歴史的事実に目を向けたものが多い。本時では、それぞれの考えを表明するだけに留まったが、「今の意見をどう思う？」「なぜ〇〇と思ったのですか？」と問うことで、事実へ着目させていくことができたものと思われる。

② 日米それぞれの立場とも、事実認識がなされないままに価値認識（どちらに賛成か）を問うものとなった。原爆投下に至る戦争を調べようという事実認識へ目を向けるためには『たった1枚の切手でなぜこんなにもめるのか』と扱う方が妥当であったと考えられる。

討論が、事実に関係のない早急な価値判断になってはならない。今後の課題とする必要がある。

② 吟味を加えていく段階では、新聞報道記事を中心資料として位置づけた。これまでの学習で新聞資料の活用を積極的に位置づけたり、読み方や意味の不明な語句は辞典を用いたりする学習技能を培っていたため、短時間の内に3枚の新聞記述を読解（日本の主張に赤線、アメリカの主張に青線を附す）できる子どもたちが目立ったものの、新聞をばらばらとめくるだけの行動やプリントへの記述内容が隣

【表-2】「その国の主張に賛成するわけ」

日本の主張に賛成	24名
・被爆者（今も苦しんでいる人たち）にとってあまりにも悲惨でひどいものだから。	15
・原爆の使用は間違いだから。	4
・戦争の終結を早めるために原爆を投下したわけではない（実験のため）から。	2
・原爆投下は記念にはならないから。	
・どう考えても日本側の理由が正当だから。	
・（記述なし）	
アメリカの主張に賛成	13名
・日本が先に戦争を始めたから。	6
・日本も他国にひどいこと（南京大虐殺、侵略）をしていて自分だけ被害者というのは勝手すぎると思うから。	4
・原爆投下がなければもっと戦争が続いて多くの人が犠牲になっただろうから。	3
中立の主張（どちらの主張でもない）	1名
・真珠湾と原爆とも、ざんこくどうして、どちらがよいとは言えないから。	

註

- 1) 藤岡信勝「二十一世紀社会科の展望」(『社会科教育』明治図書 No400, 1994年12月, 120~133頁)。なお、以下の引用文中の《》は、引用者が附したものである。
- 2) 前掲論文 121頁。
- 3) 同 121~122頁。
- 4) 同 122頁。
- 5) 『中国新聞』(朝刊 1994年10月12日) 報道による。
- 6) 本実践事例は、校内授業研究Xとして、平成6年12月8日に実施したものである。本稿の執筆にあたって、授業分析グループE(山田教頭、木村教諭、秋山教諭、阿比留教諭、松田教諭)作成による「事後検討資料」、および小原友行氏(広島大学学校教育学部)、大学院学校教育研究科社会科教育専攻の院生の方々からの御指摘を参考にさせていただいた。感謝申し上げたい。